

はじめに

インドは残酷な国である。

人はいまだに出自で差別され、一部の豊かなエリートは貧しい人々が道端で死んでいく様が目に入らない。一泊数百ドルする高級ホテルの裏側で建設労働者たちがテント暮らしをし、その子供たちが汚染された泥水の中で裸で遊んでいるのは、インドの都会ではむしろありふれた風景である。

一九九二年、私が寺院建築調査で初めてインドを訪れた時、その印象は強烈であった。夜行列車に乗るためには、プラットフォームを埋めつくすように横たわっている何百人という貧しい人たちをまたがないといけなかった。貧困はどこを向いても目に飛び込んできた。その後、人類学を学び直し、一九九九年から約三年間、かつてのマイスール（旧マイソール）藩王国の首都であった南インド・カルナータカ州のマイスール市に滞在し、王族

カーストの調査・研究を行った。その頃はインド経済がゆつくりと成長し、人々の生活水準も徐々に上向きになっていくことが感じられた。

この本では二〇〇九年から二〇一七年までカルナータカ州の州都であるベンガルール（旧バンガロール）市に滞在していた時期に出会った人々の話を中心となるが、この時期は、さらにインド社会が目に見える大きな変化を遂げた時期と重なる。例えば裕福なエリートと貧困層という社会の両極が背中合わせのように共存していた状況は、エリートたちが郊外の高層アパート（日本でいうところのタワーマンション）に移り住み始めてから、徐々に変わりつつある。最近の高層アパートは、同じ敷地内にオフィスビルの他、高級ショッピングモール、私立学校、さらに病院まで揃えている。

私がアパートを借りて住んでいたベンガルール市の北西部にあるマレーシユワラム地区の近くでも、かつて巨大な電化製品工場のあった敷地が、こうした新しい住宅地へと変貌した。そこにできた私立学校にはこのエリアを再開発した不動産業者の名前がつけられた。なんと、あからさまなと思っていたが、この学校は一年も経たないうちにベンガルール市の有名エリート校の一つになってしまった。まさにゲートレッド・コミュニティの誕生で

ある。この閉じられたエリアで高額のマンションを購入し、敷地内の外資系企業のオフィスで働き、子供をやはり敷地内のエリート校へ通わせる。ここから一歩も出ずして生活が成り立ってしまうのである。もちろん、それを可能にする収入があることが大前提ではあるが。

インドの格差社会は、徐々に隔絶社会へと変貌しつつあるように思える。かつてのエリートは、貧困を目にした際にそれを優雅に無視する独特の感覚を研ぎ澄ませていた。少ない数ではあるが、国家の近代化が進めば徐々に格差は縮小されるであろうと信じ、初代首相ジャワハルラール・ネルーが描いた壮大な国家社会主義の夢に身を投じたエリートもいた。しかし、一九九〇年代以降の経済自由化によって生まれた新しいエリートには、貧困や雑然とした庶民の生活に遭遇する機会すらない。

外資系の保険会社に勤務しているという男性を友人に紹介されたことがある。私が借りていたマレーシウラムのアパートの大家が突然家賃の値上げを宣言したことに腹を立て、別の部屋を探し始めていたところで（ちなみにこのような侃侃^{かんかん}諤々^{がく}を私は数年ごと^{ごと}にやっていた）、友人がこの男性ならいいところを探してくれらるだろうと氣を利かせてくれたのであ

る。

ベンガルール市の中心部でお茶を飲んだ後、この男性が私のアパートまで送ってくれた。しかし住宅地に入った途端、「君はこんなスラムに住んでいるのか」と叫んだのである。ベンガルール市の東南部、特にITエリアが多く住む地区に住んでいる彼に、「ベンガルール市がイギリス軍の駐屯地であった時、軍やかつてのマイスール藩王国の政府で働くバラモン（最上位の司祭カースト）のために特別に作られた二つの地区の一つがマレーシユワラムで、だからここは由緒あるオールド・ベンガルールなのだ」と説明したところで、ほとんど意味はないだろう。彼にとって、自分の外国車を駐車するスペースのない場所はすべて「スラム」であるようだった。確かに私は菜食主義者（ベジタリアン）のバラモンが住み、僧院や寺院の多くある、非常に保守的なマレーシユワラムの中でも庶民的なエリアに住んでいる。より正確に言えば、行政区上はマレーシユワラムですらなく、隣接するヴィヤルカヴァル地区である。それでも私の小さなアパートのあるセカンド・テンプル通りにはその名が示すように少なくとも四つの古い寺院があり、ヒンドゥー至上主義を掲げ、現在インド中央政府の政権を握っているインド人民党（BJP）のカルナータカ州本部が

置かれている。ここが「スラム」であるはずはないのだ。

インドの新しいエリートたちは、貧困や私たちがインド独特と思うような雑多さに触れた際、露骨な嫌悪感を表すことがある。どこかのパーティーでたまたま隣に立っていた男性とベンガルールの悪名高き交通渋滞について話していたら（知らない人と喋るにはまあ無難な話題である）、突如庶民の足として親しまれている三輪自動車のオートリクシャー（単にオートと呼ばれることも）について、「あいつらは、全くもってゴキブリだよ。I hate them.」と吐き捨てるように言った。確かに、荒っぽいオートリクシャーは無謀な車線変更をし（いやそもそもインドには明確な「車線」などというものはないのだが）、ひどい時には歩道（これも理論上存在するに過ぎない）に乗り上げる。だが、それはオートリクシャーにかぎらず、インドでは誰でも程度の差はあれ、日常的にやっていることである。

もちろんオートリクシャーの運転手も言われっぱなしではない。オートに乗って、運転手と世間話をしていると、しばしば「インディラナガラ・コラマンガラ・タイプ」の悪口になる。インディラナガラとコラマンガラはベンガルールの東南部に位置し、市南部にあるIT産業の中心地に近いため、ITやBPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）の

オフィスが多くあり、そうした企業に勤めるインドのエリートたちや外国人ビジネスパーソンが多く住む高級住宅街である。こうした地区に住むインド人エリートたちはインド各地からやってきていることもあって、ほとんどカンナダ語（カルナータカ州の公用語）を話さない。オートリクシヤーの運転手たちにはこれが大いに不満である。

「お客さんは外国人なのにカンナダ語を喋るじゃないですか。あいつらはインド人で、カルナータカ州で仕事をしているのに、カンナダ語を喋らない。学ぼうという気すらないんだ。まだね、北インドの出身だっていうなら分かりますよ。でもね、カルナータカ州で生まれ育っているのにカンナダ語を喋らないっていうのはどうですかね？ 奴らはね、カンナダ語を喋ることが恥だと思ってるんですよ」

カンナダ・ナシヨナリズムを掲げ、しばしば暴力事件を起こすグループの主な構成メンバーは、このオートリクシヤーの運転手のような都市の労働者階級の若者たちである。往年のカンナダ語映画スターのファンクラブを名乗ることもある。

彼らが起こした暴力事件で最もメディアの関心を集めたのは、二〇一一年に、新しく市の北部に建設されたベンガルル国際空港（現ケンペーガウダ国際空港）へ向かう道路の途

中に料金所が設けられることになった時である。新しいエアポート・ロードを管理する民間企業は、建設費や維持費を捻出するために道路使用料金を徴収したがっていた。州政府はそれを認めたが、当時の法律ではベンガル市内の道路には料金を課すことができないと定められていた。さらに料金所を過ぎた先にいくつかの大型工場があったため、工場で働く労働者たちからも空港に行くわけではないのに毎日道路使用料を払わせられるのかと不満の声が上がっていた。

そして料金所がオープンした当日、鉄の棒を持った数十人のカンナダ・ナシヨナリストたちが現れると、料金所の建物をめった打ちにして破壊してしまったのである。彼らの行為は明らかに違法であったが（だが市内に料金所を作るのも違法だ）、庶民の利益を守るグループとして名を上げたことも確かである。しかし彼らは、普段はベンガル市内の小さな工場や商店を回って「みかじめ料」を払わせるなど、むしろ厄介な存在でもある。カンナダ文化を守るなどと高尚なことを言いながら実際はチンピラ集団とさして変わりない。彼らは労働者階級の若者たちの支持を背景に、インド人民党から候補者として選挙に出馬することを狙っているようだが、今のところ成功していない。

二〇一〇年代、大きな盛り上がりを見せたカンナダ・ナシヨナリズムの怒りは、英語をほぼ母語のように日常的に使うエリート層へと向かっていった。それは、マハラシユトラ州でしばしば暴力的な事件を起こすマラータ・ナシヨナリズムの標的が、貧しい北部のビハール州やウツタル・プラデーシユ州から来るヒンディー語話者の出稼ぎ労働者たちであるのとは大きく異なっていた。ベンガルール市の人口の約一五%を占めるといわれるタミル語話者への批判も、それほど聞いたことがない。とはいえ、南インドの米作を支えるカーヴェリ河の水量分配でカルナータカ州が下流のタミル・ナードゥ州と揉める^もたびに、ベンガルール市に住むタミル人はヒヤヒヤした思いでいたに違いない。将来タミル人がカンナダ・ナシヨナリストの標的になる可能性がないわけではない。

ますます大きくなるインド社会の内部格差と隔絶は、政治家によって宗教的対立へと置き換えられつつある。二〇一四年から現在までナレンドラ・モディを首相として中央政府の政権を握るインド人民党や、それを草の根で支える民族奉仕団(RSS)などの右翼団体は、インドにおけるイスラムの歴史を抹殺し、インドをヒンドゥー教の国家として再定義することに躍起になっている。

最近になって再燃している雌牛保護運動は、牛肉を食すことはもとより、年老いて農作業に使えなくなった牛を皮革のために利用することさえも難しくしている。二〇一五年には、ヒンドゥー至上主義者たちが牛肉を食べていると疑われた家に押し入り、その家のムスリムの男性を公衆の面前で殴り殺すという事件が起こっている。後になって、彼が所有していたのは牛肉ではなくマトンであったことが分かったが、そんなことは熱狂的な支持者たちにとってはどうでもいいことのようにだった。

北インドに比べて、暴力的な政治対立が少ないと思われていたカルナータカ州でも、二〇一五年にはヒンドゥー教の迷信や悪習を批判するラシヨナリスト（合理主義者）として知られていたM・M・カルブルギ教授が州北部の自宅で射殺され、二〇一七年にはモディ政権批判をしていた著名な女性ジャーナリストのガウリー・ランケーシユがやはりベンガルール市郊外の自宅に戻ろうとしたところを射殺された。二人を暗殺したとされる容疑者たちは最近になってようやく逮捕されたが、ヒンドゥー至上主義者の過激なグループとながりがあるとみられている。だが真相が明らかにされるかはかなり疑問である。私は殺された二人の仕事をよく知っていたし、私の友人の多くは彼らと個人的にも親しくしてい

た。大学教授をしている私の友人はガウリーが殺された時、「次は自分かもしれない」と真つ青な顔で言っていた。

ここ数年は、インド有数のエリート大学であるデリー大学やネルー大学でもヒンドゥー至上主義者たちによって、それまでの自由な校風が一変させられ、国際的に名の知られた大学教授たちや、大学の自治組織を運営する学生たちが「極左」や「アンチナショナル」（日本の文脈でいえば「反日」に相当するだろう）などと批判され、右翼団体の若者たちに攻撃されたり、不当に逮捕されたりしている。もう退職間近の大学教授の友人たちが、デモに繰り出したり、座り込みをしたりしているのをFacebookやYouTubeで見るたびに、全体主義がひたひたと静かに、だが確実に、近づいているのを感じざるをえない。

インドの残酷さ、ますます格差が広がるばかりの状況に対して、心底この国が嫌いだと思ふことが何度もあった。さらに排他的なヒンドゥー至上主義がますます力を増している状況で、インドへフィールドワークに行く時にはなんとも暗く重たい気持ちになる。なぜ私はこんな国を研究しているのだろう、こんな社会から学ぶことなどあるのだろうか。

だが、インドに着いた途端、この暗澹^{あんたん}たる気持ちは一気に吹き飛んでしまう。真夜中過ぎにベンガルル国際空港に降り立つと、そこにはこの本の登場人物でもあるドライパーのスレーシユが笑顔で待っていてくれる。翌朝、マレーシユワラムのアパートを一步出れば、近所のおばさんが声をかけてくる。

「あんた！　しばらく見なかつたけど元気だった？　また痩せたみたい。ダメじゃないのもっと食べなさいよ！」

この後彼女は、もっと太らないと子供ができないなどと言いつい出しかねないので、にっこりしながらその場を逃げ出す。八百屋さんのおじさんは、さっそく私がカンナダ語を忘れていないかテストする。「アールゲッデ（ジャガイモ）を半キロ、イルリ（たまねぎ）も半キロ、コース（キャベツ）は小さいのを一つ」となんとかこなしたと思うと、コッタンバリ・ソップ（コリアンダーの葉）をカーダンバリ・ソップ（小説の葉）と言って吹き出されてしまう。「いいよ、いいよ。それだけ思い出せば十分さ。（他の客に向かって）聞きましたか。この人、こんなにカンナダ語ができるのですよ。新聞だって読めるのですからね（本当は辞書なしでは読めない）。大したもんですよ」と、自分のことのように自慢する。

私はこんなに温かく優しい人々を他に知らない。

本書は、残酷で厳しい社会の中で、それでも明るく、優しく、たくましく生きるインドの人々の物語である。彼らのレジリエンス^{II}たくましさ^Iが一体どこから来るのかを私の身近な人々の人生を中心に描くことから考えてみたい。

これは一つのテーマに沿って、既存の研究をしらみつぶしに検討し、そこから新しい理論を生み出そうとする研究書ではない。そういう向きを求める方には、私が眉間にしわを寄せながら書いた他の著作や論文をぜひ読んでいただきたい。ただ、物語の背景をよく理解してもらえるように、各章の終わりに【解説】のコラムをつけた。これが物語を読み進める手助けになり、さらにもっとインドを知りたいと思うきっかけになってくれれば嬉しい。

後半で出てくるように、この本では私と個人的に金の貸し借りや雇用関係がある人たち

が主な描写の対象であり、物語の主人公である。これは個人の影響（それは偶発的なものに過ぎないから）を極力小さく抑えて「科学的」であろうとする、かつての人類学の方法からすれば、失格の烙印ろういんを押されてしまっただろう。だが私は金の貸し借り（後述するようにどちらかといえば貸しっぱなし）をすることによって、ようやくインド人より深いつながりができたように思う。金を貸すこと（貸せること）は、むしろ他人から信用されているのだと誇りに思うべきだということを初めて学んだ。そして、金を貸す者としての責任というものがあることも知ることになる。金を貸すことは、残酷でありながら温かさもある矛盾に満ちた依存関係の網の中に入ることである。そしてこの依存関係の網こそがインドを深く知る鍵である。

この本では、あくまで「私的」であることにこだわりたいと思う。

記述の多くは、私が話し、聞き、感じたことに基づいている。また、話し手も自身の私的でしかありえない人生を語ってくれている。私的で個別的なくつかの人生の物語から、現在大きく変化を遂げているインドの今を垣間かいま見ることができないだろうか。それが本書

のささやかなねらいである。

ここでは現代インドを包括的に捉える統計データや選挙データなどはほとんど出てこない。むしろそうした大きなデータからはこぼれ落ちてしまう人々の声を拾いたいと思う。

特に意図したことではないのだが、この本の登場人物の多くは、都市に住む上位カーストのエリートたちではなく都市の労働者であり、農村部の土地持ちの権力者ではなく土地なし農業労働者である。そのためもあってか、経済成長を続けるダイナミックなIT大国、拡大する中間層、中国と対抗する政治大国という、インドの新しいポジティブなイメージを前面に押し出す、最近のインド論とは少し趣が異なるかもしれない。

だが、インドの闇を描こうというつもりもない。

インド社会の底辺でギリギリの生活を生きる人々には、不思議と惨めそうにしている人は少ない。彼らにカメラを向けると、花売りのおばさんも牛飼いの青年も背筋を伸ばして堂々とこちらを見返してくる。現地の言葉を学び、友人とアパートを借りてインドに住み始めた二〇〇〇年頃、部屋の掃除や家事を手伝いに来てくれていた中年の女性（カナダ語では「ケラサダワル」という。直訳すれば「仕事の人」）がいた。彼女は教育を受けたことが

なく文字を知らない人だったけれど、賢くたくましい女性で、世間知らずの私にいろいろなことを教えてくれた。自分と同じように、裕福な中間層の家事手伝いとして低賃金で働く多くの女性たちの相談役にもなっていた。彼女が私に一度言ったことがある。

「私たち貧乏人には、金も地位も何にもないけど、マリヤーデ（名誉・誇り・礼節）を持つことはできるのよ」

これはそんな誇り高き人々の物語である。